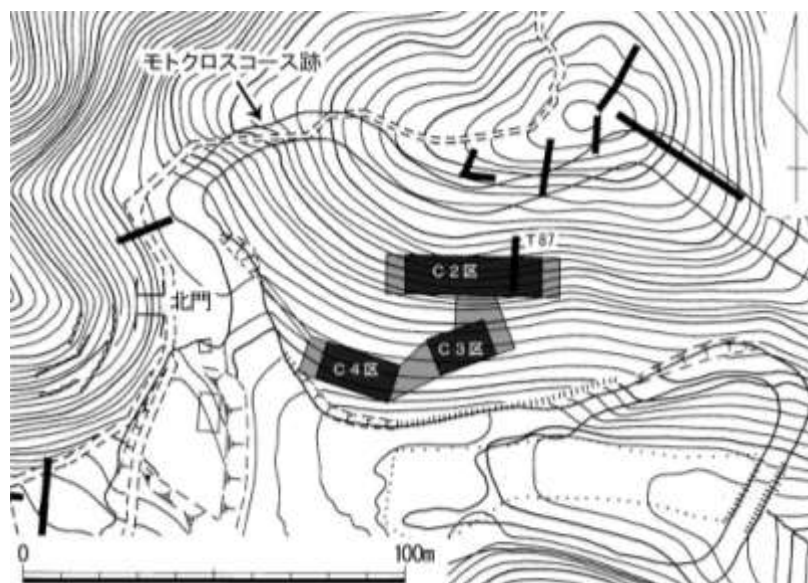


# 調査速報！ C2～4区の調査

今回、皆様に見ていただくのは、北門の東側に位置するC2～4区です。

C2区は、平成11年度の確認調査で平坦面が見つかったことから、城内の通路や何らかの施設が存在する可能性を想定していましたが、平坦面はごく小規模で通路とは考えにくいことがわかりました。平坦面上からは被熱土壌（内部が高温で焼けた穴）や小規模な建物とみられる遺構などが検出されました。これらの遺構は鬼ノ城の時期（7世紀後半～8世紀初め）よりは新しく、平安時代の可能性が高いと考えています。

C4区では、被熱土壌など若干の遺構が見つかるにとどまりました。遺物としては、各区から飛鳥～平安時代の須恵器・土師器が少量出土しています。



C2～4区の配置図(1/2,000)

今回の成果はちょっと地味かもしれないあ…でも、これも鬼ノ城の歩んだ歴史を考えるうえでは大事な発見だぞ。

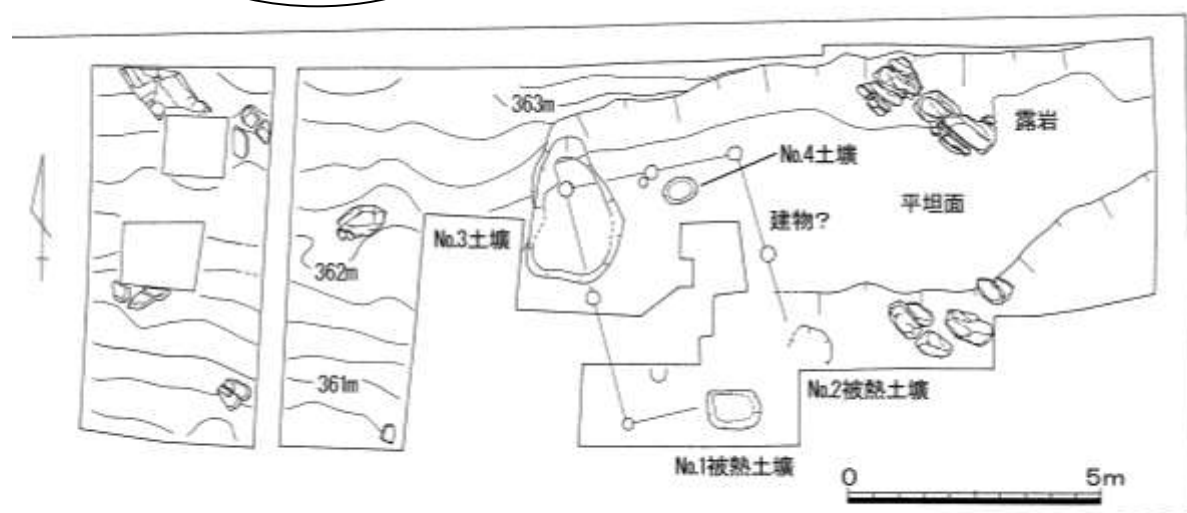


うらパパ

今から40年ほど前、鬼ノ城にはモトクロス場があったのよ。このあたりでは、今でもそのコースの跡が残っているわ。



うらママ



C2区の遺構配置図(1/150)

※調査中のため、上記内容は変更となる可能性があります。

〈お問い合わせ〉 岡山県古代吉備文化財センター 〒701-0136 岡山市北区西花尻 1325-3  
 電話 086-293-3211 FAX 086-293-0142  
 ホームページ <http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm>

魅る！古代吉備の国

# 謎の鬼ノ城 城内調査大公開 vol.X I

平成22年12月1日(水)～7日(火)

岡山県古代吉備文化財センター

## ようこそ！鬼ノ城へ

岡山県古代吉備文化財センターでは、「魅る！古代吉備の国～謎の鬼ノ城」調査事業を平成18(2006)年度から行っています。この発掘調査の成果を知り、岡山県が誇る歴史と文化を再発見していただくため、調査現場を公開いたします。

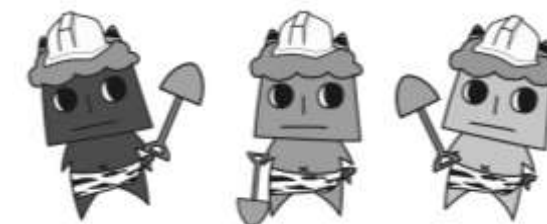
## 鬼ノ城ってなに？

鬼ノ城は、今から1,300年あまり前につくられた城です。吉備高原の南端、標高約400mの鬼城山山頂に位置しています。

西暦663年、朝鮮半島で滅ぼされた百濟を救援するため、日本は援軍を送りますが、唐と新羅の連合軍と戦い、大敗します(白村江の戦い)。その後、唐・新羅の連合軍が日本にまで攻めてくることを恐れた日本の朝廷は、西日本の各地に城をつくらせました。鬼ノ城は、そのような古代山城のひとつと考えられていますが、記録が残っていないため、はっきりしたことは分かっていません。



▲復元された鬼ノ城西門



うら坊三兄弟

## これまでの調査

調査年	調査主体	おもな成果
昭和53(1978)	鬼ノ城学術調査団	全体の規模、構造などが明らかになる。
平成6(1994)～	総社市教育委員会	城門・水門・角楼などの様子が明らかになる。
平成11(1999)	岡山県古代吉備文化財センター	礎石建物や鍛冶工房の様子が明らかになる。
平成18(2006)～	岡山県古代吉備文化財センター	多量の土器の出土。大形建物や鍛冶工房などの詳細が明らかになる。

## 今年度の調査

今年度は、城内の北端部付近で2か所の発掘調査を行っています。今回見ていただく場所(C2～4区)では、北門から城内中央部へと至る通路や、各種施設の有無を確認することを目的としています。前回見ていただいたC1区は第5水門の内側に位置しています。

※この資料の引用・転載はご遠慮ください。



みこっちゃん



# 鬼ノ城のつくり

土壁や石垣でつくられた城壁が、山頂近くを鉢巻状に取り囲んでいます。その長さは全周約 2.8 km、囲まれた城内面積は約 30.6ha あります。城壁の東西南北4か所には城門をひらき、また雨水を城外へ排水するための水門が6か所設けられています。

城内の中心部には礎石建物7棟が確認されるほか、東部には鍛冶工房が営まれたことも分かってきました。



屏風折れの石垣：城壁を外に突出させ、高い石垣を築いています。見張り台などの施設でしょう。



礎石建物：城の管理棟と、食料などを貯蔵した倉庫があわせて7棟見つかっています。



角楼：城の背後を守る施設と考えられます。(復元)



鍛冶工房：たくさんの炉を築き、城内で必要な鉄の道具を製作した工房の跡です。



西門と土壁：発掘調査の成果をもとに復元されました。



水門：雨水で城壁が壊れないように、城外へ排水する施設です。



# 鬼ノ城の四つの城門

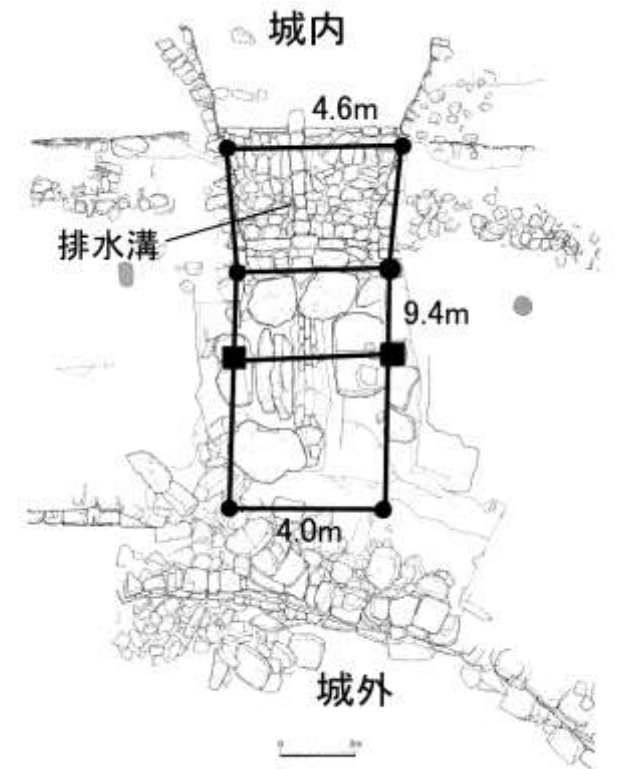
鬼ノ城では、これまでの調査によって東西南北の4か所で城門が見つかりました。門の建物は、いずれも柱を直接地中に埋める掘立柱建物で、規模は西門と南門がほぼ同じ(12.3m×8.2m)で最も大きく、北門(4.6×9.4m)がそれに次ぎ、最も小規模なのが東門(3.3m×5.6m)です。各門とも、床面には大きな石が敷かれ、柱や扉が設置される部分では、扉の敷居(蹴放し)や方形の切り込みなどの精巧な加工が行われるといった共通点があります。また、扉はいずれも内開きです。

一方、建物の柱に着目すると、西門と南門ではすべて角柱が使われていますが、東門ではすべて丸柱、北門では角柱と丸柱の両方が使われるという違いがあります。実際に現地を確認してみましょう。

## 北門

北門は、四つの城門の中で唯一、城の背面側に作られている門で、8本柱から構成されています。床面中央には石組みの排水溝が設けられており、同様の事例は667年に築城された屋嶋城(香川県高松市)の城門で知られています。

門の床面と外側の通路には1.7mほどの段差があり、出入りには梯子などが使われたと考えられます。

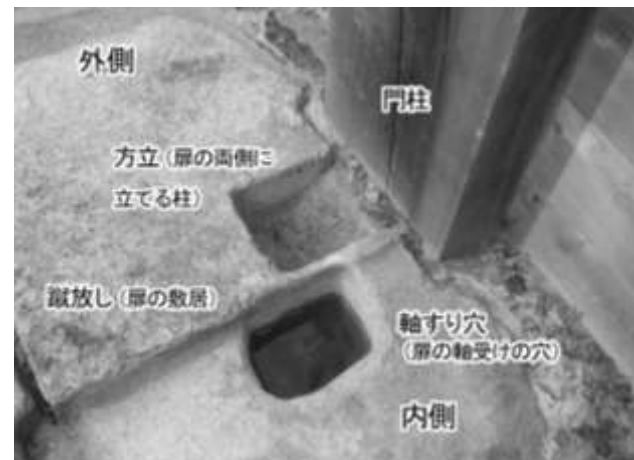


北門の平面図(1/200)

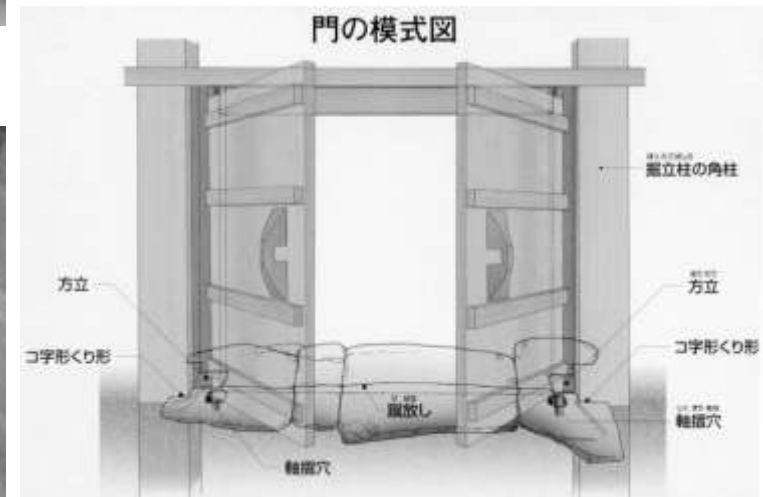
出典：『古代山城 鬼ノ城2』(総社市教育委員会 2006)を改変



整備された北門



柱・扉を設置するための加工



城門の模式図

出典：『古代山城 鬼ノ城—展示ガイド—』(総社市教育委員会 2005)を改変